

萬國幼稚園
協會案 幼稚園要目 (續き)

第六章 文 學

お話や唄は幼稚園時代の子供にこつて言葉の藝術である。よい文學を鑑賞するこいふ事は文化最高の所産の一を樂む事である。文化最高の所産即ちそれは人をして靈長たらしむる、ひき上ようこする高度の進歩が持ち來した想像こ、言語表現こである。

善い文學は普遍的な原理を、すべての時代のすべての人に理解され得る形で、具體化するものである。

一 般 目 的

快を與へる事こ、それに依て感實力を發展せしむる事。
想像を鼓舞する事こ、言語形式或は劇的表現に依て創造の欲求を喚起する事。

特 殊 目 的

言語表現を自在ならしむる事。

1. 模範的言語を與へて

2. 模範的藝術形式を與へて

活動の方向を指示する事。

——それは子供の心を動かしなほ實際には經驗しなかつた場合まで想像を働かし子供をして劇的に進展させる——
高い理想を振興させる事。

1. 滑稽談に依て、——下級の人々は他人に不快を與へてまで異狀の事を喜ぶが、滑稽の感念は無害な驚きで、驚かしたり笑はせたりする。

2. 子供の經驗を表すお話を通じて、——子供自身の經驗の中から意味のある事を取り出しそれを強め又話に依てそれを適切に結び合はして示す。

3. 如何に行ふべきか云ふ模範を與へる道德を目的としたお話に依て、——教訓は詳しく説明してはならぬ

い、子供自身で解釋し得る様に十分明白に表示せられるのでなければお話は力の無いものである。

主 題

お話の主題は、お話の中の人物の活動に依て強められた處の中に對する態度である、それは聞き手の感情上の反應である。又お話は要目に示された話題に就ての考慮から生ずる氣分に直接關係する、が話題は、あながち要目に示されたものには限らぬ、クリスマス前の晩のお話はクリスマス當時に話される——文學の形式であたへられる此の經驗の表現であるから——「お婆さんと豚」の話は連綿の觀念の表示し、子供がお互に助け合ふといふ様な活動を爲はじめた時に話されるべきである。

年長の子供達の爲のお話は、童話、英雄談、寓話、滑稽談、フェアリーの話、實話ミ云ふ様に分類される、幼稚園時代の子供に聞かせる話の中で初めに挙げた三つの題目に叶ふものは極めて僅少である。簡単な童話として話さしてもよいのは「リトル、レッド、ライディング、フウド」で

ある。英雄談と同様の目的で役に立つのは簡単な良い子供達の實話——「子猫プシー」や「セドリックはどうして子猫を救ったか」の如き——である。よく知られてゐる小數の寓話にのみ、此の時代の子供を興がらせるのに十分明瞭な意味がある、——「野兎ミ龜」「北風ミ太陽」「ライオンと廿日鼠」の如き——。

幼稚園に於て話される多くの話は、フェアリーの話、滑稽談、實話の三題目の下に分類される。最もよいフェアリーの話は屢々話される。子供はお話の中の人物の架空自在を認め想像の自由を楽しむ。子供はお話の中の人物を彼の正邪の理想を基礎づける模範としては受け入れない。滑稽談は、平常よく知て居る人が常と異た受け答をしたり、又話手が語調を變へたりするのにその特色がある、しかしその中にわかる様な、不快な分子を含んではならない。ジニア、ブレット、マン」では立場そのものがユーモアを創造する。なぜならば「私はもう死んでしまつた」と叫ぶのは小人自身であるから。かような話は決して倫理上の意味を傳へるには適しない。それは純ユーモアを意味して

る、日常の生活状態を對象とするお話に於ては細かい倫理上の入組ひがあつてはならぬ、——常に正義を勝たす正邪の争鬪をしくむ他には——。明かに教訓の爲こいふお話は、いづれの要目に於ても僅である。お話は又屢々讀で聞かされる。話し手の劇的な所作は子供の注意を惹き又保つ助けにはなるが、或時は子供の注意は、話そのものゝ上に直接集中せられるべきである。その様な場合にお話は讀まれる。——讀み手の個性は話し手程に強く感じられないから——。面白味の大部分が、其獨特の言ひ方に基く處のお話には、讀む話として選ばれ得る。挿畫のあるお話は、この目的の爲によいものである。殊に「ピーター、ラビット」や「リトル、ブラック、サムボー」の如きは、よい。

言語の選擇

話し方に用ひられる言語は、お話の題目に適合したものでなければならぬ。寓話は簡明な言語で、フェアリーの話は美しい流暢な言語で表はさるべきである。幼稚園時代の子供にまつては話の行動は早くあるべきである。詳細な

記述的説明はされるべきではないから。此の時代には律動的語句の反復が大層喜ばれる。

世界文學のお話は、子供に理解される程度にまで單純化されてはならない、美しく又力強い、かげに含まれた意味を略して其の眞價を低く下けるよりも、其の主題に適合して形式で與へる思想を、子供が感賞し得る時代になるまで待つ方がよい。後になれば完全な形式で感賞され得るものを、効力の弱い譯意で與へるこいふ事は不必要である。そして子供の各時期によく適したよいお話はその他にある時には「ジグフリード」「キングアーサー」「バセフォネ」「ゴールデンタツチ」は幼稚園の子供に適す様にされる事もある。

●●●●●
お話の形式

お話には、前置き、葛藤、頂點、終を備へた一定した脚色がある。主な人物は明瞭にそして他は背景となるべきである。小さい子供達は主役人物を對照的に表す脚色の反復をここに喜ぶ。たゞへば「リトル、ワンアイ、トウアイス、スリーアイス」の如き。

よい形式の例

或時小さい少女が果物畑の木の下を歩いて居ました。その時丁度頭に下つて居る枝に、まあるい、眞紅なりシヨのなつてゐるのを見ました。

「まあ、どうだ、リンゴさん、私の處へ降りて来て下さいな」と少女は云ひました。けれどもリンゴは少しも動きませんでした。小鳥が葉かげから飛び立つてリンゴのなつてゐる木の枝にとまりました。

「まあ、どうだ駒鳥さん、リンゴに歌できかして下さい、そして私の處に来るようして下さい」

と少女が叫びました。こま鳥は幾度もくく歌ひました、けれどもリンゴは動きませんでした。「私はお日様に助けて下さる様に願ひまよう」と少女は思ひました。

「どうだ、お日様、あの赤いリンゴの上に照りつけて下さい、そして私の處へ来るようして下さい」

と少女は云ひました。お日様は盛に照しましたそして紅い頬を兩方とも撫でました。けれどもリンゴは少しも動きませんでした。丁度其時大風が吹き起て来ました。

「まあ、どうだ風さん、あの紅いリンゴを揺つて下さいそして私の處へ来るようして下さい」

と少女が叫びました。風は右に左にリンゴの木を吹きなきました。そして紅いリンゴは少女の前かけの中に轉がり落ちました。

幼稚園要目(續き)

廿日鼠と松鷄マツトリと小さい赤い鷄

或日小さい赤い鷄が食物を拾ひ歩いてゐました。そして一粒の小麥を見つけた。「おや、こゝを御覽こゝを御覽！私は小麥を見つけた、誰か粉ひき小屋へ挽いてもらひに行つてくれるだらう？」そうすればお菓子かたべられるのだがナ」と鷄が云ひました。

「誰がこれをお菓子かたべられるのだがナ」と鷄が云ひました。

「私ぢやない」と廿日鼠が云つた。

「私ぢやない」と松鷄が云つた。

「そんなら私が自分で行かう」

と、小さい赤い鷄が云つた。

「誰が粉を家へ持て行くか」

「私ぢやない」と廿日鼠が云つた。

「私ぢやない」と松鷄が云つた。

「そんなら私が自分で爲よう」

と、小さい赤い鷄が云つた。

「誰がお菓子を作るか」

「私ぢやない」と廿日鼠が云つた。

「私ぢやない」と松鷄が云つた。

「そんなら私が自分で作る」

と、小さい赤い鷄が云つた。

「誰が此のお菓子を焼くか」

「私ぢやない」こ廿日鼠が云つた。

「私ぢやない」こ松鷄が云つた。

「そんなら私が自分でする」

と、小さい赤い鷄が云つた。

「誰がお菓子を食べるか」

「私が」こ廿日鼠が云つた。

「私が」こ松鷄が云つた。

「それは私が食べませう」

と、小さい赤い鷄が云つた。

方 法

家庭教育は、新入學兒童の學校で初めて話されるお話の種類を定める。教養ある家庭から來る子供達は、どんな長さのお話でも聞くが、初めて話されるものが、かつて幼稚園の先生から聞いたものであるならば聞く力は益増進さるゝに違ひない。「マザー、グース」は短くて、明瞭で、黒板畫や、繪や身振を使って話す事の出來るお話で、手初めのお話

としては大層善いものである。

お話の数は、子供の進歩の如何による。原則として或るお話は毎日される。よく知られて大層好かれてゐる。「最上文學」の話は、教師が其の一字の位置を違へても、子供がそれを正し得るまで練り返される。お話は斯様な方法で、十分受け入れられ、想像と表現の子供の肝要な生活の部分成す。

子供達は極く簡單なお話を、くりかへして話す様に又他の話を劇的にする様に獎勵されるべきである。然しもし子供達が、まだお話を思ひ起す様になつてゐなかつたら、子供からお話の事柄を無理に引き出すよりも教師自身が一度話す方がよろしい。

又子供達は、獨創的の話を話す様に獎勵されるべきである。それらは未熟のものであつても、想像的思考を自在にし、それに言語的表現を與へる力か、練習を重ねるに従つて漸次起る。繪の解釋をする事は、子供がお話をする時の創造力を増進する助けになる。次に掲ぐるはミレーの「歩き初め」に就いて四歳の子供がした話である。

『或る處にお父さんとお母さんと赤ちやんが居た。お父さんは終日働いてゐた。やがてお母さんが「お父さんのお歸り」云つた。お父さんは赤ちやんを抱いて家にはいつてお夕飯をすませた。』

この簡單なお話は、よい文學形式の規定に叶てゐる。お話や唄や詩の爲に子供達は剪り紙の作品を喜んで作る。その作品を本に纏めて家へ持ち歸るこ、そこで又子供達は唄やお話を家族の爲にくりかへす。一團の爲のかういふ繪本は團の各自の子供が各自の考を發表し、それに先生が題を書いて作り出す。

話し手の、話し振りはお話の興味に大層關係を及す。聞き手に、話を感じさせようとする人は、お話が、話す價値あるものといふ事を信じ、世の思想の最高最上のものを與へてゐるこいふ事こ、他の何れの方法によつても與へ得られぬ(これのみの力である)といふ事を信じなければならぬ。又話し手は、聞き手が話の全價値を得る事の出来るように話す事が出来るこいふ事を信じなければならぬ又話さうとする話をよく知らなければならぬ。たとひ言語を記憶す

るのみでなく明かに目に見えるように爲得るほどに。なぜ話すかこいふ事の主部をそれを如何にして力づけて發表しようかこいふ事を知らなければならぬ。又話し手は表情に富んだ語調や顔つき、身振で話すほご自分自身お話に感じ、お話を樂しまなければならぬ。劇的な話し方は遙かに雄辯法に優るものである。

力弱い話し方。まとまりなく話す話し方。誰も記憶出来ないほごあまり多くの事柄を話す事。味をかみしめる餘地もない程僅かしか話さない事。子供の發達と子供の要求とは關係なくH程の題目へ話を結びつける事。あまり多く日常經驗の事柄をならべる事。年長兒に適切な話をする事。以上の缺點を犯した時、話し話し方はその全價値を失ふ。

効 果

短いよいお話の感覺、

種々なお話をくりかへし得る能力、(主な出來事を順序正しくならべて)

簡単な想像話を創造する能力。

種々な短いお話をも劇的話す能力。

詩 と 歌

「マザー、グース」の歌は、幼児にとつての善い詩である。各々が、ある特種な場合に情緒的な反動を惹き起す。「マザー、グース」をよく知らない子供達にはこの歌を與へるこよい。

狀況を記述し或は情緒を表現する、一句、一節、歌と詩とは子供達に、彼等の經驗を語り得る爲に與へられる。之等の長短や難易は子供の發達とその家庭教育によるものである。やゝ長い詩は子供に讀み聞かせるのによく、一節或は、一行が子供の歌から、屢々記憶する爲に選ばれる。

◆ゲーテは言つたことがある。

「子どもがその初期に於けるやうな發達を續けたならば人間はみな天才になれる」

生れてから數年の間は、人間一生で發育の最も旺盛な時期で、身體、知能の兩方面共に著しい進歩を示すのである。

中にはこの發育が一時に来て人を驚かすものがある。世は之を神童と言つて非常に評判するけれども、俗に「十で神童、十五で才子、二十歳過ぐればたゞの人」といふけれども、たゞの人ですらめよいが、かうした子どもは畸形的發育をしたので、概して早熟で、その發育がとまるか、或は白痴となつたり、狂人となつたりして、終りを全ふしないものが少くない、幸ひにこの奇蹟的發育が永續する時、その人は天才と言はれて永く世に稱へられるのである。